

# 古今和歌集

仮名序

「やまと歌は、人の心を種と  
して、万の言の葉とぞなれ  
りける。世の中にある人、  
事業繁きものなれば、心に  
思ふことを見る物聞く物に  
つけて、言ひ出せるなり。  
花に鳴く鶯、水に住むかは

〔通釈〕「和歌は、人の心の中に思ふことを本に  
して、いろ／＼の言葉をつらねて詠み  
出したものである。それは草木の種が  
本になつて、多くの枝や葉が茂り出す  
のと同じやうなものである。この世の  
中に生きてゐる人は、事業の多いもの  
であるから、心にいろ／＼な思が起つ  
てくる。そのいろ／＼な思を、花鳥風  
月などの見る物聞く物に託して、詠み  
出したのが即ち歌である。花の枝に來  
て鳴く鶯や、水の中に住んで鳴くかは  
づの声を聞くと、それは皆それ／＼に  
心からうたひ出した歌である。してみ

づの声を聞けば、いきとし  
いけるもの、いづれか歌を  
詠まざりける。力をも入れ  
ずして天地あめつちを動かし、目に  
見えぬおに神がみをもあはれと  
思はせ、男女をとこをうなの中をも和げ、  
猛き武夫もののふの心をも慰むるは

歌なり。

「この歌、天地あめつちの闢ひらけはじ  
まりける時よりいできにけ  
り。

〔古註〕天の浮橋の下にて、女神男神めがみをがみとなり給へることをいへる歌なり。

しかあれども、世に伝はる  
事は久方の天あめにしては、下した

ると、生きてゐる程のもので、何か歌  
を詠まないものがあらうか。歌を詠む  
のは人だけではない、鳥やけだものや  
虫まで、かうして皆それ／＼に歌を詠  
むのである。力をも入れないで易々と  
天地を動かしたり、目に見えない幽冥  
の鬼神を深く感じさせたり、男女の間  
を睦しくなるやうにしたり、荒々しい  
武士の心をも慰めたりなどするのは、  
皆歌の徳である。

「さてこの歌といふものは、天地開闢の  
時から出来たものである。

さうであるけれども、しつかりと歌と  
して世の中に伝つてきたのは、天では  
下照姫の詠まれた歌からはじまり、

照姫にはじまり、

〔古註〕下照姫は、天稚彦の女なり。せうとの神のかたち、岡谷にうつりて輝くを詠める、えびす歌なるべし。それらは文字の数も定らず、歌のやうにもあらぬ事どもなり。

あらがねの土にしては、素

蓋鳴尊よりぞ起りける。千

早ぶる神代には、歌のもじ

も定まらず、すなほにし

て、ことの心分き難かりけ

らし。人の世となりて、素

蓋鳴尊よりぞ、三十文字余

り一文字は詠みける。

〔古註〕素蓋鳴尊は天てらすおほん神のこのかみなり。女と住み給はむとて、出雲の国に宮造し給ふ時に、其の所に八色の雲のたつを見て詠み給へるなり。八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣造るその八重垣を。

「かくてぞ花をめで、鳥を羨

国土では素蓋鳴尊の詠まれた歌から起つてゐるのである。神代の時分には、まだ歌の文字の数も定まつてゐず、その上質朴で古風で、どういふことを詠んだものか、その歌の意味が今見てはわかりにくいものであつたやうだ。さて人の世となつてから、あの素蓋鳴尊が詠まれた歌のやうに、専ら三十一文

字の歌を詠むやうになつたのである。

「さうして、花を賞翫したり、鳥を羨んだり、霞を憐んだり、露の身の上を悲

み、霞を憐び、露を悲ぶ心  
ことば、多くさまぐにな  
りにける。遠き処も出で立  
つ足もとよりはじまりて、  
年月をわたり、高き山も、  
麓の塵ひぢよりなりて、天  
雲たなびくまで生ひのぼれ

しんだりする心や詞が、だんだん多  
くなりさまぐになつたのである。大  
層遠い所でも、最初に踏み出す足許か  
らはじまつて、長い時日の間には行き  
着くことが出来、非常に高い山でも、  
麓の塵ほどの泥土から積り積つて、雲  
のたなびく程高くなつたのであるやう  
にこの歌も段々と広く盛んになるであ  
らう。

るが如くに、この歌もかく  
の如くなるべし。

「難波津の歌は、みかどの御<sup>おほん</sup>  
始<sup>はじめ</sup>なり。

〔古註〕大鷦鷯<sup>おほささぎのみかど</sup>帝の、難波津にてみこと聞えける時、東宮を互に譲りて、位に  
即き給はで、三年になりにければ、王仁<sup>わに</sup>といふ人の、いぶかり思ひて  
詠みて奉りける歌なり。この花は、梅の花をいふなるべし。

あさか山の言の葉は、采女<sup>うねべ</sup>

「さて「難波津に」といふ歌は、天子の  
御事を詠んだ最初の歌である。

そして「あさか山」といふ歌は、采女  
の戯れから詠んだ歌で、

たはぶ  
の戯れより詠みて、

〔古註〕葛城の大君を陸奥<sup>みちのく</sup>へ遣はしたりける時に、国の司こと疎かなりとて、饗応などしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりて詠めるなり。これに、その大君の心解けにける。

ふたうた  
この二歌は、歌の父母のや  
うにてぞ、手習ふ人のはど  
めにもしける。

「そもく歌のさま六<sup>むつ</sup>なり。

からの歌にもかくぞあるべ  
き。その六種<sup>むくさ</sup>の一つには、そ  
へ歌、

〔古註〕大鷦鷯の帝をそへ奉れる歌、「難波津にさくやこの花冬ごもり、今を春  
べとさくやこの花」といへるなるべし。

二つには、かぞへ歌、

〔古註〕「さく花に思ひつくみのあぢきなさ、身にいたつきのいるも知らずて」といへるなるべし。（これはたゞ言にいひて、物に喩へなどもせぬものなり。この歌いかにいへるにかあらむ、その心、得がたし。五つにたゞ言歌といへるなむ、これにはかなふべき。）

この二首の歌は、歌の父親母親のやうであり、子どもの手習の始めにも先づこれを習ふことにしてゐる。

「さて先づ歌には六つの体がある。漢詩にも此の六つの体があるであらう。そ

の歌の六体の第一はそへ歌、第二はかぞへ歌、第三はなずらへ歌、第四はたとへ歌、第五はたゞごと歌、第六はいはひ歌である。

三つには、なずらへ歌、

〔古註〕「君にけき朝あしたの霜のおきていなば、恋しき毎に消えや渡らむ」といへるなるべし。（これは物になづらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌よく適へりとも見えず。」「たらちねの親かよこの養蚕まゆの繭まゆこもり、いぶせくもあるか妹にあはずて」かやうなるや、これには適ふべからむ。）

四つには、たとへ歌、

〔古註〕「わが恋はよむとも尽きじありそ海の、浜の真砂はよみ尽くすとも」といへるなるべし。（これは万の草木鳥獸につけて、心を見するなり。この歌は隠れたる処なむなき。されど、はじめのそへ歌と同じやうなれば、少しさまを変へたるなるべし。」「すまの海士あまの汐やくけぶり風をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり」この歌などや適ふべからむ。）

五つには、たゞごと歌、

〔古註〕「いつはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし」といへるなるべし。

〔別古註〕これは、言のとのほり正しきをいふなり。この歌の心更にかなはずとめ歌とやいふべからむ。「山ざくらあくまで色を見つるかな、花ちるべくも風吹かぬ世に」。

六つには、いはひ歌（なり）。

〔古註〕「この殿はうべも富みけりさき草の、三みつば四よばに殿造せり」といへるなるべし。

〔別古註〕これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌はいはひ歌とは見えずなむある。「春日野に若菜摘みつゝ万代を、祝ふ心は神ぞしるらむ」これや少し適ふべからむ。おほよそ六種むくさに別れむことは、えあるまじきことになむ。

「今の世の中色につき、人の  
心花になりけるより、あ  
だなる歌、はかなきことの  
みいでくれば、色好みの家  
にうもれ木の、人知れぬ事  
となりて、まめなる処には、  
花すゝき、ほに出すべき事

にもあらずなりにけり。そ  
のはじめを思へば、かゝる  
べくなむあらぬ。<sup>いにしへ</sup>古の世々  
のみかど、春の花の朝、<sup>あした</sup>秋  
の月の夜毎に、さぶらふ人々  
を召して、事につけつゝ、  
歌を奉らしめ給ふ。あるは

「さて今の世の中は、争つて色に媚び、  
人情は浮華になつたので、浮薄な歌や  
たわいもない詞ばかりが出来るから、  
歌といふものは、たゞ色に耽ける人の、  
内証の翫弄物となつて、まじめな所へ  
はおもてむきに顕して出されぬやうに  
なつてしまつた。歌の起源を考へると、  
こんな有様である訳のものではない。  
昔の御代々の天子は、春の花の時分や、  
秋の月夜などといふ時には、いつでも、  
御身近くに仕へてゐる人々をお召しに  
なつて、何か事がある度毎に、歌を詠  
んで献るやうに仰せ付けられた。さう

して、或は花に憧れて人気遠い所まで  
も尋ねまはつたり、或は月に心を寄せ  
て、まだ出ぬ前や入つてしまつた後な  
ど暗いのに、案内も知らない所をあち  
らこちら歩きまはつたりするやうな、  
風流な心々を、その詠んだ歌によつて  
御覧なされて、あれは賢い者だあれは  
愚な者だといふことを、御存知なされ  
た事であらう。又、公の上の事ばかり  
ではなく、私の思を述べるのにもこの  
歌によつたのである。例へば、さゞれ  
石にたとへたり筑波山にいひかけたり  
して、君を御祈り申し、又、身に過ぎ

花をこふとてたよりなき所  
にまどひ、あるは月を思ふ  
とて、しるべなき闇にたど  
れる心々を見給ひて、賢さかし  
愚おろかなりとしろしめしけむ。  
しかあるのみならず、ささ  
れ石にたとへ、筑波山にか

た喜びや、心に余る程の楽しみのある  
時、或は富士の煙に寄せて人を恋しく  
思ひ、或は松虫の音を聞いて友だちを  
慕ひ、年をとつては、高砂や住の江の  
松も自分と同じ齢に生ひ立つものゝや  
うに思ひ、又年老いた男が、男盛りで  
あつた昔のことを思ひ出し、年老いた  
女が、花のやうになまめかしかつた昔  
のことを思ひ出してよく／＼する時に  
も、すべて歌を詠んで自分の心を慰め  
たのである。又、春の朝に花の散るの  
を見たり、秋の夕暮に木の葉の落ちる  
音を聞いたり、或は来る年毎に、鏡に

けて、君をねがひ、よろ  
こび身に過ぎ、たのしみ心  
に余り、富士の煙けぶりによそへ  
て人を恋ひ、松虫の音に友  
をしのび、高砂たかさざい、住の江の  
松も、あいおひのやうに覺  
え、男山の昔を思ひいでて、

写つてみえる自分の白髪や皺が多くな  
つてくるのを歎いたり、草葉に置く露  
や水に浮く泡などに自分の生命をたと  
へて、そのもろくはかないことに驚い  
たり、或は昨日までは栄耀豪華を極め  
た人が、今日は勢力を失つて世に捨て  
られ、昨日まで親しかつた人が俄に疎  
遠になり、或は松山の波や、野中の清  
水に自分の思を寄せたり、秋の萩の下  
葉をながめたり、暁の鳴の羽搔する  
数をかぞへたりして独り淋しがつたり、  
或は身のつらい事を人に話したり、吉  
野川を喩にひいて世の中を恨んだりし



をみなへし  
女郎花の一時くねるにも、

歌をいひてぞ慰めける。ま

た、春の朝にあした花の散るを見、

秋の夕暮に木の葉の落つる

を聞き、あるは年毎に鏡

の影に見ゆる雪と波とを歎

き、草の露、水の泡を見て、

我が身を驚き、あるはきの

ふは栄えおごりて、けふは

時をうしなひ、世にわび、

親しかりしも疎くなり、あ

るは松山の波をかけ、野中

の水を汲み、秋萩の下葉を

ながめ、暁の鳴のはね搔を

てきたのに、今では、永久な物のため  
しに引いた富士山の煙も立たぬやうに  
なり、長柄の橋も新しく架けかへられ  
るやうになつたと聞く人は、世の転変  
の甚しい歎を、歌を詠むことによつて  
のみ慰めたのである。

数へ、あるは呉竹の憂きふ  
しを人にいひ、吉野川をひ  
きて世の中を恨み来つるに、  
今は富士の山の煙も立たず  
なり、長柄ながらの橋もつくるな  
りと聞く人は、歌にのみぞ  
心を慰めける。

「いにしへ古より、かく伝はるうち  
にも、奈良の御時よりぞ弘  
まりにける。かのおほん世  
や、歌の心をしろしめした  
りけむ。かの御時に、正おほき  
三みつのくらゐ位柿本かきのもとの人麻呂ひとまろなむ、  
歌の聖ひじりなりける。これは君

「ずっと昔から、かういふやうに伝つて  
きたうちにも、取り分けて奈良の御代  
から盛に詠まれるやうになつたのであ  
る。その御代に、柿本の人麻呂といふ  
人が歌の聖人であつた。又、山部の赤  
人といふ人がある。この人も歌が不思  
議に上手であつた。人麻呂は赤人の上  
に立つことが出来にくく、赤人は人麻  
呂の下に立つことが出来にくかつた。

もひともし、身をあはせたり  
といふなるべし。秋のゆふ  
べ、立田川に流るゝ紅葉を  
ば、帝のおほん目には錦と  
見給ひ、春のあした、吉  
野の山の桜は、人麻呂が心  
には雲かとのみなむ覚えけ

る。又、山部<sup>やまべ</sup>の赤人といふ  
人あり。歌にあやしく妙<sup>たへ</sup>な  
りけり。人麻呂は、赤人が、  
上<sup>かみ</sup>に立たむ事難く、赤人は、  
人麻呂が下<sup>しも</sup>に立たむ事難く  
なむありける。

渡らば錦中や絶えなむ」人麻呂「梅の花それとも見えず久方の天ぎ  
る雪のなべて降れいば」「ほのく」と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟  
をしぞおもふ」赤人「春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ野をなつか  
しみ」夜寝にける」「わかか浦に潮みちくればかたをなみ蘆べをさし  
てたづ鳴きわたる」。

この人々をおきて、又すぐ  
れたる人も、呉竹のよゝに  
聞え、片糸かたいとのよりくくに絶  
えずぞありける。これより

さきの歌をあつめてなむ、  
万葉集となづけられたりけ  
る。かの御時よりこのかた、  
年は百年もゝとせに余り、世は十代とつぎ  
になむなりにける。

「こゝいにしへに古のことも、歌の  
心をも知れる人、詠む人多

この二人の他にも、歌に秀でた人は、  
各時代々に顕れて、絶えたことがな  
かった。さて、この奈良の時代までの  
歌を撰集して、それを「万葉集」と  
名づけられたのである。その時代から  
こちらへ、年数は百年余りになり、天  
皇の御代数は十代目になつてゐる。

「その間に、昔の事や歌の本旨などをよ  
く知つてゐる人、又それをよく知つて  
歌を詠む人は多くなく、わづかに一人

からず、わづかに一人二人  
なりき。しかあれど、こ  
れかれ、得たる所得ぬ所、  
互になむある。今この事  
をいふに、つかさくらる官位高き人  
をば、たやすきやうなれば入  
れず。そのほかに、近き世

二人である。しかもその一人二人の人  
でさへ、どれも十分な歌人ではなくて、  
互に得失がある。今その得失を論じよ  
うと思ふが、官位の高い人は、余り軽  
く扱ふやうで無礼であるから、遠慮  
して論評の中へは入れない。その他で、  
近世で歌人であるといふ名声の聞えた  
人を挙げると、先づ僧正遍昭は、歌の  
体裁はよく捉へ得てゐるけれどもその  
歌には誠実の意が乏しい。これを物に  
喩へてみると、上手に描かれた美人画  
には、徒に人の心を動かす美はあるけ  
れども、生きた真実の精神がないやう

にその名聞えたる人は、即  
ち、僧正遍昭は、歌のさま  
は得たれども、まことすく  
なし。たとへば、絵にかけ  
をうなる女を見て、いたづらに心  
を動かすが如し。

なものである。

葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」、嵯峨野にて、馬よりおちて詠める「名にめでしおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」。

ありはらのなりひら

在原業平は、その心あま

りて言葉足らず。いはゞ、

しほめる花の、色なくて匂にほひ

残れるが如し。

〔古註〕

「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」、  
「おほ方は月をもめでしこれぞこの積れば人のおいとなるもの」、「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまざるかな」

ふんやのやすひで

文屋康秀は、詞はたくみに

て、そのさま身におはず。

いはゞ、商人あきびとのよききぬ著

たらむが如し。

〔古註〕

「ふくからに野辺の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ」、  
深草のみかどの御国忌みくにぎに「草ふかきかすみの谷に影かくしける日のくれしけふにやはあらぬ」

宇治山の僧喜撰は、詞かす

在原業平の歌は、心が余つて言葉がいひ足らない。ちやうど、しぼんだ花の色はなくなつて、その匂だけがまだ残つてゐるやうなものである。

文屋康秀の歌は、詞の用ゐ方が巧妙であつて、その技巧が内容に相応しない。喩へていふと、心の卑しい商人が、身に不釣合な美服をまとうたやうなものである。

宇治山の僧喜撰の歌は、言葉が幽玄であるけれども、その一首の意味が始終

かにして、<sup>はじめをはり</sup>始終たしかならず。  
いはゞ、秋の月を見るに、  
暁の雲にあへるが如し。

〔古註〕「わが庵は都のたつみ鹿ぞすむ世をうち山と人はいふなり」よめる歌多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。

<sup>をのこまち</sup>小野小町は、<sup>いにしへ</sup>古の衣通<sup>そとほり</sup>姫<sup>ひめ</sup>  
のながれなり。あはれなや

うにて、強からず。いはゞ、

よき女<sup>をうな</sup>の悩めるところある

に似たり。強からぬは、女<sup>をうな</sup>

の歌なればなるべし。

〔古註〕「思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを」、「色見えてうつろふものは世の中の人のこころの花にぞありける」、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」、そとほり姫の歌「わがせ子が来べきよひなりさいがにの蛛<sup>くも</sup>のふるまひかねてしるしも」

を貫徹してゐない。喩へていふと、秋の月を見てゐるのに、暁の雲が出てきて月をかくしたやうなものである。

小野小町の歌は、感情があふれてゐるやうであるけれども、強いところがな  
い。喩へていふと美人に何か悩むところがあるのに似てゐる。

おほとものくろぬし  
大友黒主は、心はをかし

くて、そのさまいやし。い

はゞ、たき木おへる山人の、

花の蔭にやすめるが如し。

〔古註〕「おもひいでゝ恋しき時は初雁のなきてわたると人は知らずや」、「かゞみ山いざ立ち寄りて見て行かむ年へぬる身は老いやしぬると」

この他の人々、その名聞ゆ

る、野辺におふる葛かつらの這ひ

ひろごり、林にしげき木の

葉の如く多かれど、歌との

み思ひて、そのさま知らぬ

なるべし。

「かゝるに、今、すべらぎの

天の下しろし召すこと、四よ

大友黒主の歌は、その心は面白いが、その体裁はいやしい。喩へていふと、たき木を負うた賤しい山家爺が、花の木の下で休んでゐるやうなものである。

この他の人々で、歌人としての名の世に聞えてゐる人は、野原に生えてゐる

葛のやうに充満し、林に繁つてゐる木の葉のやうに沢山あるけれども、いづれも皆、只漫然と歌だと思つてゐるだけで、歌の本旨といふものを心得てゐないのであらう。

「さうであるのに、今上天皇の御治世も、今年で九年目になる。どこからどこまでも洩れた所のない君の御慈愛は、遠



つの時、九このがへりになむ  
なりぬ。あまねきおほん  
うつくしみの波、八島のほ  
かまで流れ、ひろきおほん  
めぐみの蔭、筑波山の麓よ  
りも繁よろづくおはしまして、万  
の政まつりごとを聞き召すいとま、

諸々もろくの事を捨て給はぬあま  
りに、古いにしへの事をも忘れど  
旧ふりにし事をも興し給ふと  
て、今もみそなはし、後の  
世にも伝はれとて、延喜五  
年四月十八日に、大内記紀  
の友則、御書ふみの所のあづか

く国の外までも行きわたり、広く渥  
い君の御恩恵は、筑波山の蔭よりも繁  
くすべての人の上に行きわたつてある、  
有難い御治世で、いろ／＼の御政事を  
行はせられる御ひま／＼に、文学技芸  
一切の事を御奨励なさる余りに、神代  
以後の代々の帝が侍臣等に歌を詠ませ  
られた事や、万葉集の撰定があつた事  
などを忘れず、それらを再興遊ばさ  
うといふ思召で、今も御覧遊ばされ、  
又後々の世にも伝はれと思召されて、  
延喜五年四月十八日に、大内記の紀友  
則、御書所預の紀貫之、前の甲斐少目

の凡河内躬恒、右衛門の府生の壬生忠  
岑等に仰付けられて、万葉集に入らぬ  
古歌、ならびに自分々々の歌をも集め  
て差上げしめられて、その中で、梅の  
花をかざす春をはじめとして、時鳥を  
聞く夏、紅葉を折る秋、雪を見る冬  
にいたるまでの四季の歌、又は、鶴亀  
に寄せて君の御寿命の長からんことを  
思ひ、その他の人をも祝ふ賀の歌、秋  
の萩や夏の草を見て妻を恋ふ恋の歌、  
逢坂山まで旅立つて行つて手向の神を  
祈る別離、羈旅の歌、或は春夏秋冬の  
四季にも入らない種々の歌などを選ば

り紀の貫之、前の甲のさう

官凡河内躬恒、右衛門の

府生壬生忠岑らに仰せられ

て、万葉集に入らぬふるき

歌、みづからのをも奉らし

め給ひてなむ、それが中に、

梅をかざすよりはじめて、

せられた。それがすべて千首あまりで、  
二十卷になった。名づけて古今和歌集  
といった。

時鳥を聞き、紅葉を折り、

雪を見るにいたるまで、又、

鶴亀につけて君を思ひ、人

をも祝ひ、秋萩夏草を見て

妻を恋ひ、逢坂山にいたり

て手向を祈り、あるは春夏

秋冬にも入らぬくさぐさの

歌をなむ撰ばせ給ひける。

すべて、千歌はた巻。名づ

けて古今和歌集といふ。

「かく、この度集め選ばれて、

山した水の絶えず、浜の真ま

砂さの数多く積りぬれば、今

は飛鳥川の瀬になる恨うらみも聞

えず、さされ石のいはほと

なるよろこびのみぞあるべ

き。それわれら、詞は、春

の花の匂少くして、空しき

名のみ、秋の夜の長きをか

こてれば、かつは、人の耳

におそり、かつは歌の心に

「かうして今度この歌集が出来て、斯道の流は絶えず、名歌も数多く集つた事であるから、今から後は歌道の衰頽するといふ恨もなく、さされ石が巖となるやうに、ますく栄えて行く喜ばかりがあるべきである。さて私達は、詞はまだ稚拙であつて何の妙味もないの

に、虚名だけは、此の集を撰んだといふことにかこつけて、歌道に長けてゐるやうにいひ立てられたから、一方では人の聞く所を憚り、又一方では歌に對して恥ぢ入る次第ではあるけれども、立つても居ても寝ても覺めても、自分達がかういふ聖代に生まれて、歌集勅撰の美挙のある時にあつたのを嬉しく思つてゐる。歌聖人麻呂は既になくなつてゐるけれども、歌道は滅びないで、この古今和歌集に残り留まつてゐることよ。上古のやうに歌はあつても、文字がなければ後世に伝へる術は

はぢ思へど、たなびく雲の  
立ちる、啼く鹿のおきふし  
は、貫之らが、この世に同  
じく生まれて、この事の時  
にあへるをなむよろこびぬ  
る。人麻呂なくなりたれ  
ど、歌のこととゞまれるか

ないが、たとへ時世は変遷し、諸事は  
盛衰しても、万の事を興し給ふ聖代に  
は、この歌の文字といふものがあるか  
ら、誠に幸である。この歌集が、世に  
絶えず散佚しないで、永久に伝つたな  
らば、その後の世に於いて歌の本旨を  
も知り、この歌集の勅撰された事情を  
も弁へた人は、この歌集によつて、大  
空の月を見るやうに、古代を仰ぎ尊  
び、この歌集の出来た今の世を恋ひ慕  
はないであらうか。

な。たとひ、時移り事去り、  
たのしび悲しみゆきかふと  
も、この歌の文字あるをや。  
青柳あをやぎの糸絶えず、松の葉の  
散り失せずして、まさ木の  
かづら長く伝はり、鳥の跡  
久しくとゞまれらば、この

歌のさまをも知り、事の心  
をも得たらむ人は、大空の  
月を見るが如くに、古を仰  
ぎて、今を恋ひざらめかも。

---

底本：国立国会図書館デジタルコレクション 『学習参考 古今和歌集詳解』 松本竜之助 著